

重層的決定と偶然性 : あるいはアルチュセールの孤独

著者	植村 邦彦
雑誌名	関西大学経済論集
巻	54
号	3-4
ページ	337-354
発行年	2004-11-11
その他のタイトル	Overdetermination and Contingency, or Althusser's Solitude
URL	http://hdl.handle.net/10112/5047

重層的決定と偶然性

——あるいはアルチュセールの孤独——

植 村 邦 彦

要 約

ルイ・アルチュセール (1918-1990) は、1960年代に「重層的決定」や「構造的因果性」という概念をマルクス主義に導入することによって、ヘーゲル主義的マルクス主義や実存主義的マルクス主義を批判し、マルクス主義内部での「認識論的切断」を理論化しようとした思想家であり、フランスだけでなく世界的に大きな影響を与えた。しかし、この試みは、思想的言説空間では「構造主義」や「ポスト構造主義」へと向かうマルクス離れに棹さし、アルチュセール自身も、晩年には「偶然性」や「出会い」の理論化を模索しつつ、マルクス主義への批判を表明するにいたった。本稿は、このようなアルチュセールの理論的模索の全体像を明らかにし、その意味を確認しようとするものである。

キーワード：重層的決定；偶然性；アルチュセール；マルクス主義
経済学文献季報分類番号：01-21；01-22；03-22；03-46

はじめに

ルイ・アルチュセールほど孤独について繰り返し論じた思想家はいないかもしれない。論じられた孤独の意味は、しかし時間とともに微妙に変化している。たとえば1964年の「フロイトとラカン」では、彼は「同時代におけるフロイトの孤独」をこう描いている。

「私が言っているのは人間的な孤独のことではなく（彼には、貧困を味わったとはいえ、先生や友人がいた）、理論上の孤独のことである。というのも、彼が実践の指定場所で毎日見出すことになった異常な発見を思考したいと思ったとき、すなわち、その発見を抽象的な概念の厳密な体系という形式のもとで実現したいと思ったとき、たとえ理論上の先例を、理論における父親を自分のために探しても、そういうものをほとんど見つけられなかったからである。以下のような理論上の状況を蒙り、それを改善しなければならなかったのだ。自分自身にたいして自ら父親になること。自らの発見を位置づけるための理論的な空間を職人として自らの手で構築すること」（EPs, p.27. 29頁）。

ここでは「孤独」とは、「理論上の先例」を見つけれなかった理論的開拓者の独創性を強調するための表象である。英雄伝説への欲望。しかし、それから13年後の1977年に書かれ

た「マキャヴェリの孤独」では、孤独の意味はもう少し深刻である。

「これら読者を彼が敵・味方になるまで分裂させ、しかも歴史的な環境が変わっても、そう分裂させるのをやめないでいるということは、特定の陣営を彼に指定する難しさ、彼を分類する難しさ、彼が誰で、何を考えているかを言う難しさを証明している。彼の孤独とは、まずこれである。分類しがたい人と見えること、この人はアリストテレスの伝統に入る、この人は自然法の伝統に入る、といったようには彼をほかの思想家といっしょに特定の陣営、特定の伝統に入れることができないこと」(SM, p.313. 407頁)。

ここでも「孤独」とは「理論上の孤独」のことなのだが、それはたんに先例がないということだけではなく、その理論あるいは思想が結果として引き起こす「孤独」、つまり「特定の陣営、特定の伝統に入れることができない」という思想そのものの孤立無援状態を意味しているのである。アルチュセールは、こういう言い方もしている。

「おそらくここにマキャヴェリの孤独の極みがある。政治思想史の中につかのみ彼が占めたユニークな席に。道徳的教化をめざして長らく続いてきた宗教的・理想主義的政治思想の伝統、彼が峻拒した伝統と、それに続く自然法という政治哲学の新しい伝統、すべてを覆い尽くし、新興ブルジョアジーの自己確認をなした伝統との隙間にある席。後者の伝統がすべてを覆い尽くしてしまう前に、前者の伝統から自由になったこと、これがマキャヴェリの孤独である」(SM, p.319. 416頁)。

古い伝統を峻拒してそれと闘っている間に、自分の闘いとは遠いところで新しく出現した思想が、この自分をも押しつけて「新しい伝統」の地位を獲得しつつある。そのような「隙間にある席」しか与えられなかった孤立無援の単独者の悲哀。

この二つの「孤独」の間には、おそらくはアルチュセールが自覚した彼自身の孤独の深まりがある。「重層的決定 surdétermination」や「構造的因果性 la causalité structurale」という概念をマルクス主義に導入することによって、ヘーゲル主義的マルクス主義や実存主義的マルクス主義を峻拒し、マルクス主義内部での「認識論的切断」を理論化しようとしながら、結果的に、フランス共産党内では主流的立場を占めることができずに孤立し、思想的言説空間では「構造主義」や「ポスト構造主義」へと向かうマルクス離れに棹さしてしまった、という孤独。あるいは、アルチュセール自身のメタファーを使うならば、理論における父親を見つけることができないままに自らが父親になることを決意し¹⁾、ある思想的伝統との闘いに入ったものの、13年間にわたる理論構築の試みの後に見いだしたのは、跡を継ぐはずの息子の不在あるいは離反だった、という孤独。

「おそらくここにアルチュセールの孤独の極みがある」、とすでにグレゴリー・エリオットが(「マキャヴェリの孤独」に重ね合わせた美しい論文「アルチュセールの孤独」で)書いて

ている。つまり、「現代思想の歴史において、自分がラディカルに批判し再構築しようとしたマルクス主義の伝統と、先行者〔である自分〕を覆い隠してしまい、68年世代が自己イメージをその中に見いだすことになった『ポスト・マルクス主義』との間の、ユニークで不確定な席を占めたという事実²⁾」に、である。

アルチュセールのこの孤立無援の理論構築の試みが、フランス内外でのスターリン主義と反（あるいは脱）スターリン主義との対立状況への介入としてどのような同時代的意味をもっていたか、ということについては、エリオットの論文やマーティン・ジェイの大著の一章が詳しい³⁾、弟子にして友人であるエティエンヌ・バリバールの証言もある⁴⁾。アルチュセールの孤独そのものについて私が付け加えるべきことは何もない。また、彼の「重層的決定」論や「最終審級における決定」論がマルクスの読み方としてどのような問題を含んでいるか、ということについては、別の機会にすでに論じた⁵⁾。ここで私が改めて論じてみたいのは、アルチュセールの「重層的決定」論の意味とその行方である。

1. 「矛盾と重層的決定」

よく知られているように、アルチュセールの学問的出発点となった高等研究資格論文は「ヘーゲルの思考における内容について」と題されたヘーゲル研究であり⁶⁾、その彼がマルクス主義哲学者として一貫して持ち続けたのは、ヘーゲルとマルクスの弁証法の「構造的な差異」(PM, p.92. 155頁)は何かという問題であった。「重層的決定」も、まずは「矛盾についてのマルクス主義的概念」(ibid. 156頁)として導入されたものである。

アルチュセールが1962年の論文「矛盾と重層的決定」で最初に提起したのは、「革命はなぜロシアにおいて可能であったか？ 革命はなぜロシアにおいて勝利をおさめたのか？」(p.93. 157頁)という歴史的な問いであった。その答えは、「ただ一国において当時可能であったあらゆる歴史的矛盾の集積と激化」にある。彼は、レーニンの諸著作に依拠しながらこう続けている。「20世紀の初頭、司祭たちの欺瞞のもとに、膨大な数の『蒙昧な』農民大衆のうえに、脅威が高まっていただけにいっそう苛酷にのしかかっていた封建的搾取体制の諸矛盾……。大都市とその周辺、鉱山や油田地帯等々において大規模に発展した資本主義的、帝国主義的搾取の諸矛盾。様々な民族の全体に押しつけられた植民地的搾取と戦争の諸矛盾。資本主義的生産方法の発展の段階……と、農村の中世的な状態とのあいだの矛盾。搾取者と被搾取者とのあいだだけでなく、支配階級自体の内部……にもあった全国的な階級闘争の激化」(pp.94-5. 158頁)。

このような諸矛盾に「さらに『例外的な』他の諸状況」がつけ加わる。「ツァーの圧迫によって亡命をよぎなくされたロシアの革命のエリートの『先進的』性格。……1905年の革命

の『総稽古』……。最後に、……帝国主義諸国の疲弊がボルシェヴィキに歴史における『彼らの突破口』をつくらせるために与えた予期しない『休止』と、ツアーを排除しようとした英仏ブルジョアジーの不本意ではあるが有効な支持」(p.95. 159頁)。

しかし、これは何に対する答えなのだろうか。アルチュセールが言いたいのは、結局次のことに尽きている。「たとえ矛盾一般(しかし矛盾はすでに特殊化されている。つまり、敵対する二階級のあいだの矛盾のうちの本質的に具現された生産力と生産関係のあいだの矛盾)によって、革命が『日程にのぼっている』状況が十分に規定されるとしても、この矛盾は、その直接の効能だけでは、『革命的状況』を誘発することはできないし、ましてや革命の破壊的状況や革命の勝利を誘発することはできない」(pp.97-8. 162頁)。

そんなことは当たり前ではないか、と言って済ませればいいのか。別にマルクス主義的革命家でなくても、具体的な歴史的状況を考察しようとするほどの者なら誰でもそんなことは知っている、と。しかし、アルチュセールが「重層的決定」というフロイトの用語を持ち込むのは、まさにここなのである。『矛盾』は、矛盾がそのなかで作用する社会全体の構造から切り離すことができず、また存在の形式的な諸条件、およびそれが支配する諸審級からも切り離すことができない。したがって矛盾それ自体は、その核心においては、それらによって影響され、同じ一つの運動のなかで、決定するものであると同時に決定されるものであり、それが活動力をあたえる社会構成体の様々な水準と様々な審級によって決定されるものである。それゆえ、われわれは矛盾は、原理的に言って重層的に決定されるということが出来る」(p.99. 165頁)。

アルチュセールは、「その重層的決定という用語(他の学問分野から借用した)にとくに執着してはいない。しかし、他に適当なものがないのでこの用語を一つの指標としてと同時に一つの問題として使用するのであり、またこの用語が、われわれがなぜヘーゲルの矛盾とはまったく別のものを問題にしているかをかなりよく示すことができるので、使用するのである」(p.100. 165頁)と断っているが、ここでの「重層的決定」とは、要するに、歴史的出来事を「単一の内的原理に還元すること」(p.102. 168頁)など不可能だ、ということにほかならない。つまり、「重層的決定」とは、様々な要因が複合的に絡まり合った歴史的状況(conjoncture)の複雑性を表現する名辞なのである。アルチュセールはそれを「例外的状況の例外性」とも言い換えている。

「レーニンの実践と反省が証明しているように、ロシアにおける革命的状況がまさしく階級の基本的な矛盾の強度の重層的決定という性格に基づいているというのが真実であれば、おそらくこの『例外的な状況』の例外性がなにに基づいており、またあらゆる例外と同様に、この例外はその規則に照明をあたえはしないか、——規則のあずかり知らぬことである

が、例外が規則そのものではないかどうかを自問する必要がある。実際、結局のところわれわれはつねに例外のなかにいるのではないだろうか？……様々な例外、だがそれらは何にたいしての例外なのだろうか？ 純化された、単一の『弁証法的』図式の、抽象的ではあるが気持ちのよい、人を安心させるある種の理念にたいする例外ではなからうか？」(p.103. 171頁)

しかし、「例外が規則そのもの」であるのだとしたら、そして「われわれはつねに例外のなかにいる」のだとしたら、「重層的決定」などという概念にどのような存在理由があるのだろうか。アルチュセールにとっても、それが問題であった。

「だが、それならば、もしあらゆる矛盾が歴史的实践のなかで、またマルクス主義の歴史的经验にとって重層的に決定された矛盾として現れるとすれば、もしヘーゲルの矛盾にたいして、マルクス主義的矛盾の種差性を構成するのがこの重層的決定であるとすれば、もしヘーゲルの矛盾の『単一性』が、『世界観』とくにそれを反映する歴史観につながるのであれば、マルクス主義的矛盾の重層的決定の内容とはいかなるものであり、その存在理由は何であるかを尋ね、またマルクス主義的社会観がいかにしてこの重層的決定のなかに反映されるかを知る問題を提出する必要がある。この問題は重要である。なぜなら、マルクス主義における矛盾の独自の構造と、彼の社会観および歴史観とを結びつける必然の絆を示さないかぎり、マルクス主義歴史理論の概念そのもののなかにこの重層的決定の基礎を築かないかぎり、このカテゴリーは『宙に浮かんだ』ものとしてとどまるであろうことは明白だからである。じっさい、このカテゴリーは、いかに正確であり、たとえ政治的实践によって検証されているとしても、これまでのところは、記述的 descriptive なものにすぎず、したがって偶然的 contingente であり、——それゆえに、あらゆる記述と同様、出現するあらゆる哲学的理論の意のままになるからである」(p.106. 174頁)。

このように「重層的決定」という概念でアルチュセールが考えようとするのは、「これまでのところは記述的なものにすぎず、したがって偶然的」である事態だということを改めて確認しておこう。後に1972年から1986年にかけて書き継がれた草稿「マキャヴェリと私たち」では、彼は、マキャヴェリの思考と実践に即しながら、その対象となる「偶然的」なものを「不確定空間 l'espace aléatoire」と名付けている。

「国民 nation は階級闘争の賭金であり、その結果である。そして階級闘争が目標とするのは、すでにある形態の征服ではなく、まだ実在しない形態の現実性なのである。まだ実在しないゆえに、この形態がどんなものとなるかは、既存の諸要素の配置に依存している。言い換えると、国民を実現する可能性と限界は、経済的要因だけではなく、地理的、歴史的、言語的、文化的な一連の存在要因全体に依存しており、それらの諸要因が、いってみれば不確

定空間を形成して、国民はそのなかで具体的形態を取ることになる」（EPII, p.53. 673-4頁）。

「重層的決定」という概念をマルクス主義の中に導入するということは、このような、いわば答えようのない問いを発することであった。「例外的」で「偶然的」で「不確定」な事態をそのようなものとして「決定」する「必然の絆」という、見出しようのない答えを見出そうとすること、それが以後のアルチュセールの思考の軌跡なのである。

2. 「最終審級における決定」と位相論

アルチュセールは結局、この「重層的決定」という概念の正当化の根拠をマルクスのテキスト中に見つけることはできなかったが、その代わりに彼が見つけたのは、老エンゲルスの「最終審級における決定」という表現であった。「重層的決定」という概念は、1962年の段階では、いわば「上部構造の相対的自律性」と「最終審級における決定」というエンゲルスの表現を唯一の頼みの綱として、マルクス主義に係留されたのである。彼が引き合いに出したのは、1890年のエンゲルスの次のような文章であった。

「経済状態は土台です。しかし、上部構造の様々な諸要因——階級闘争の政治的諸形態と闘争の諸結果——戦いを勝ち取った後に勝利した階級により確定される諸制度など——法形態、はたまたこれら現実の諸闘争すべての、これに関与した者たちの頭脳への反映、すなわち政治的、法律的、哲学的諸理論、宗教的見解とその教義体系への発展が、歴史的な諸闘争の経過に作用を及ぼし、多くの場合に著しくその形態を規定するのです。それはこれらすべての要因の相互作用であり、そのなかで結局はすべての無数の偶然事（すなわちその相互の内的な関連があまりにも隔たっているか、またはあまりにも証明不可能であるために、われわれとしてはそのような内的関連が存在しないとみなし、無視することができるような物事や事件のことです）を通じて、必然的なものとして経済的運動が貫徹するのです⁷⁾」。

エンゲルスは、ここでたしかに歴史における経済以外の諸要因の規定性を認めているが、それでも長期的に見れば、「結局のところ [=最終審級において] 決定的なのは経済的な前提と条件⁸⁾」だと述べている。しかし、アルチュセールの疑問は、「例外的状況」を決定するのが「諸審級における諸要因の諸決定」であるならば、それこそが「規則」なのではないか、ということであった。問いの方向の違いは決定的である。だからアルチュセールは、次のような言い方で、結局はエンゲルスと決別せざるをえない。

「私としては、ここで、経済的なものによる最終審級における決定にたいする有効な諸決定（上部構造および、国内的、国際的な特殊な諸状況から生じる）の集積と呼ぶことのできるものを取り出すだけで充分である。ここにおいてはじめて、私が提起した重層的に決定される矛盾という表現が明らかになるように思われる。……上部構造および国内的、国際的変

動の諸形態が、大部分は種差的であり自律的であり、したがって純然たる現象に還元できない現実的存在であることが認められるやいなや、この重層的決定は不可避的となり、思考可能なものとなる。……すなわち、この重層的決定は歴史の一見して特殊な、あるいは異常な状況（たとえばドイツ）にかかわるものではなく、普遍的なものであり、経済的な弁証法はけっして純粹状態で作用するものではなく、また《歴史》において見られることは、これらの上部構造、その他の審級が作用をなしとげたのちにうやうやしく遠ざかったり、あるいは《時》が来たために、《経済》陛下が弁証法の王道を進むことができるように、自らはその純然たる現象として姿を消すなどということではけっしてないのである。最初の瞬間にせよ、最後の瞬間にせよ、『最終審級』という孤独な時の鐘が鳴ることはけっしてない」（PM, pp.112-3. 183-5頁）。

つまり、アルチュセールにとって「最終審級における決定」とは、永遠に訪れることのない「最後の審判」のような極限概念にすぎないのである。言い換えれば、「重層的決定」とは、「最終審級における決定」という表現にもまだ残っている「単一の内的原理への還元」をいっさい否定し、それに対して様々な審級の「有効な諸決定の集積」という複合性こそを直視しようとする、そのような理論的決意表明なのである。ただし、それはまだ決意表明であって理論ではない。アルチュセール自身がこう述べている。「上部構造やその他の『状況』の独自の有効性についての理論は大部分が今後ねりあげられるべきものであると言わねばならない」（p.113. 185頁）。

ここからアルチュセールはどこまで行くことになるのだろうか。「重層的決定」が「最終審級における決定」への懐疑の表明なのだとすれば、言い換えれば、エンゲルスが述べたような「すべての無数の偶然事を通じて、必然的なものとして経済的運動が貫徹する」という認識を拒否するものだとすれば、「重層的決定」とは「無数の偶然事の集積」の別名にすぎないことになるのではないだろうか。

アルチュセールはそのことを恐れていたのかもしれない。そう考えれば、彼が、「矛盾と重層的決定」への「補遺」（1965年）の中で、エンゲルスの思考を「古典的なブルジョア・イデオロギーの明証性」（PM, p.125. 218頁）にすぎないと断定した語調の激しさも理解できる。恐れは転移なのだ。そこでの表現によれば、エンゲルスの「最終審級における決定」という「モデル」は「中途半端な解決」にすぎない。

「なぜなら、これらの偶然とこの必然のあいだの関係は確立されておらず、解明されてもいないし（これはまさしくこの関係を否定することであり、したがってその問題を否定することであるが）、エンゲルスはこの必然を、これらの偶然に対して完全に外的なものとして（無数の偶然のあいだで結局は自己の道を切りひらく運動として）提出しさえしているから

である。しかしそうだとすれば、われわれはこの必然がまさしくこれらの偶然の必然であるのか、またそうだとすれば、なぜそれが必然であるのかを知らないのだ。この問題は未解決のままである」（pp.118-9. 207頁）。

それでは、アルチュセールはこの問題を解決することができたのだろうか。解決の一つの試みとして、彼は1967年から1975年にかけて「位相論 topique」に手がかりを求めている。「土台と上部構造」という隠喩を「位相の配置」として読み取ろうという試みである。ただし、結論を先に言えば、それは空しい努力だった。

アルチュセールは、1967年秋の「哲学についてのノート」ではじめて「位相論」に言及しているが、その時点では、それは「マルクスレーニン主義の革命家や精神分析家の実践のような実践」のための指針として考えられていた。彼らは、「自分の実践を通じて変えようとしている状況のなかで、自分の実践を通じて関係しあう他の『諸要素』が占めている場所との関連で、自分がいかなる場所を占めているのかを知る」必要があるのだが、「自分の場所を知るためには、場所の多面的位置決定が、すなわち位相構造の把握が前提となる」（EPPII, pp.326-7. 904-5頁）、ということである。

しかし、1972年の「自己批判の要素」では、「位相論」の意味は変化している。位置そのものが規定性を示すというのだ。「経済的下部構造が『下方に』、それ固有の様々な決定力を伴わされた上部構造が『上方に』。……下部構造のその位置が、端折ることのできない現実性を、すなわち、最終審級での経済的なものによる決定を指し示す」（SM, pp.187-8. 235-6頁）。1975年の「アミアンの口頭弁論」でも、同じ説明が繰り返される。「マルクス主義的位相論は、社会を建物の隠喩として与える。建物のもつまっとうなロジックから言って、すべての階は土台に支えられる」（SM, p.208. 271頁）。

位置そのものが規定性を示すというこの発想は、おそらく「無意識／前意識／意識」（1920年代以降は「エス／自我／超自我」）というフロイトの「局所論 Topik」のアナロジーである。しかし、アルチュセールの「位相論」は、「土台は土台であるがゆえに最終審級である」ということに尽きる。これは同義反復にすぎない。そもそもたんなる建物の隠喩に「偶然と必然」に関する決定論的な理論を求めようとする自体が無理なのである。こうして話は再び振り出しに戻る。「マルクス主義歴史理論の概念そのもののなかにこの重層的決定の基礎を築く」ことは、いったいどうすれば可能なのだろうか。

3. 構造的因果性

先に見たように、アルチュセールが1962年に「重層的決定」という言葉で表現しようとしたのは、歴史における「例外的状況」を決定する諸矛盾の複合性であった。1963年の「唯物

弁証法について」での説明によれば、矛盾が「複合的に—構造的に—不均等に決定されている」という「ひどい表現」よりは、「打ち明けて言えば、それより短い一つの言葉——重層的に決定される、という言葉は私は好んだのである」（PM, p.215. 357頁）。しかし、1965年の『資本論を読む』での説明は、それとは明らかに異なっている。ここでは、「重層的決定」という概念で表現しようとしたのは、「構造による構造の決定」であり、「構造的因果性そのもの」だということだ。

「このテキスト [『要綱』序説第三章] において問題になっているのは、支配的生産構造による特定の従属的生産構造の決定であり、したがって、ひとつの構造の他の構造による決定、支配的で規定的な構造による従属的構造の諸要素の決定である。私は前に、精神分析から借りた重層的決定の概念によって、この現象を説明する試みをしたことがあるが、精神分析の概念をマルクス主義理論に移転させることは恣意的な借用ではなく、必然的な借用であるとみなしてよい。というのは、どちらのケースでも、問われていることは同じ理論的問題であるからだ。その問題とはこうである——どのような概念をもって、構造による要素の決定、構造による構造の決定を思考することができるのか。……われわれはこの問題を《Darstellung》（叙述、上演）の概念のなかに全面的に要約することができる。この概念はマルクス主義の価値理論全体の認識論的な鍵概念であって、その対象はまさに結果における構造の現前様式、したがって構造的因果性そのものを指示するのである」（LCII, p.64. 252-3頁）。

「構造的因果性」という概念が表現するのは、「構造はその結果に内在しており、スピノザ的意味で結果に内在する原因であり、構造の現存全体はその結果のなかにあり、要するにそれ自身の諸要素の独自の結合にほかならない構造はその結果の外部では何ものでもない」（LCII, p.65. 256頁）、という事態である。この概念もまたフロイトに由来することを、アルチュセールは1967年秋の「哲学についてのノート」で示唆している。「後に続く哲学が練り上げられる、あるいは練り上げ可能になるには、時間がかかる。……（たとえば、フロイトに由来する本質的ななにかがあつてはじめて、われわれは『構造的因果性』がはっきり分かる、あるいはむしろ、『構造的因果性』というカテゴリーを提出することができる、というふう）」（EPPII, pp.331-2. 909-10頁）。

ここでもアルチュセールの発想のもとになったのは、おそらくフロイトの「無意識」とマルクスの「生産様式」とのアナロジーであった。1966年8月22日の「D [ルネ・ディアトキーヌ] への手紙」で、彼は次のように説明している。

「マルクスは、新たな現実が発現したそのメカニズムを説明しておこうとはっきり言っているのだが、ヘーゲル型もしくは進化論型の定式化をいくつか試みたにもかかわらず、自ら

の理論的作業の実践において発生 *genèse* に関する諸概念(ヘーゲルの諸概念)をはねつけることによって始めて、そのメカニズムが説明できた……。しかもそれと同時に、この新たな構造は、いったん発現すれば、ちょうど無意識と同じように非時間的に機能する。マルクスは、どんな生産様式も『永遠』であると適切な用語で言っている。……彼が生産様式は『永遠』であると言うとき、生産様式が閉じた回路として、無時間性の様式に基づいて機能するということが、『年代順』、すなわち、単なる時間の継起あるいは、通俗な意味での歴史性という時間性に従うどころか、それがちょうど無意識と同じようにそのような時間性からは独立して、絶えず自分自身を再生産し、この無一時間的、非一時間的、『通時的』再生産が、その他のすべての意味でと同様に経済的意味での『生産』の絶対的条件であるということをお願いしたいのだ。……生産様式の『永遠性』は、個体の現実の歴史が無意識の非時間性と両立しないわけではないのと同じように、現実の歴史、今問題になっている生産様式のもとで産みだされたはっきり決定された歴史上の時間性と両立しないわけではない。いずれの場合にも、この現実の歴史は構造(前者は生産様式、後者は無意識)の無一歴史性によって決定されているのである」(EPs, pp.93-4.104-5頁)。

アルチュセールは、こうして『資本論』の認識対象としての「生産様式」の構造的再生産を解明しようとしたのだが、「構造的因果性」が「無一時間的、非一時間的、通時的再生産」を明らかにするための概念だとすれば、これはもう「例外的状況の例外性」に関する思考ではないだろう。彼が「重層的決定」という言葉に込めた意味合いは、1962年からは明らかに変化している。しかし、むしろフロイトには近づいたのである。

だからアルチュセールは、同時に、フロイトの「無意識」にもっと即した形でイデオロギー論の構築へと向かっていく。1976年の「フロイト博士の発見」では、彼はラカン以上にフロイトを評価するにいたる。「その点についてほとんど語らない、あまりに語ることの少ないラカンや、逆にその点についてしか語らないライヒと違って、フロイトは家族、道徳、宗教などの存在をきわめて重視していた。私自身の言葉を用いるならば、国家のイデオロギー装置の存在が幼児に、したがって幼児の無意識の性欲やその無意識的な抑圧におよぼす影響をきわめて重視していた」(EPs, p.212. 236頁)。

同年の論文「マルクスとフロイトについて」からも、アルチュセールが「無意識の理論」をイデオロギー批判の理論として理解していることがわかる。「実際フロイトは、無意識の理論を樹立することによって、哲学的、心理的そして倫理的なイデオロギーの大きな弱点に触れたのである。無意識とその効果を発見したフロイトは、『意識』によって統一性が保証される、あるいは完成される『主体』としての『人間』に関する『自然的』で『自然発生的』なある種の考え方を批判したのだ。……意識によって統一性が保証される、あるいは完

成される主体としての人間というイデオロギーは、いい加減な断片的なイデオロギーではなく、とりもなおさずブルジョア・イデオロギーの哲学的形態にほかならない」(EPs, pp.232-3, 256-7頁)。

こうしてこれ以後は、イデオロギーの「構造的因果性」の解明こそがアルチュセールの思考の中心に置かれることになった。彼が1976年に確認しているように、「『資本論』はこの[具体的な個人を形作る]数多くの決定のうちで最も重要なものの研究にとどまっており、『数多くの決定の総合』によって具体的な個人を再構成しようとはしていない」(EPs, pp.237-8, 261頁)。だからこそ、『資本論』が対象とした「生産様式」という大きな構造とは別に、人間諸個人を「数多くの決定の総合」たる構造として思考することが、改めてアルチュセールの課題になったのである。

「重層的決定」とは、本来は夢の内容やヒステリーの症状において複数の無意識的・前意識的願望が「一つの表現において出会う⁹⁾」事態を表す概念なのだから、それがイデオロギー論に適用されるのはむしろ当然だろう。その後のアルチュセールが、フロイトやラカンを援用しながら、「人間と自らの『世界』との関係の表明であり、言いかえると、自らの現実の实在条件にたいする、現実上の関係と想像上の関係との(重層的に決定された)統一体」(PM, p.240, 415頁)という独自のイデオロギー概念に基づく上部構造論を構築していったことはよく知られているし、彼のイデオロギー論の特徴と問題点については、ジェイのほかにもテリー・イーグルトンによる詳細な批判的考察がある¹⁰⁾。

しかし、生産様式論とイデオロギー論の外部では、アルチュセールの「重層的決定」論はいったいどこに行ってしまったのだろうか。歴史における「例外的状況の例外性」や「偶然性」についての理論的思考は、どうなってしまったのだろうか。

4. 偶然性と出会い

1962年の問題設定が忘れ去られたわけではない。1976年の「マルクスとフロイトについて」でも、アルチュセールはこう述べているからである。「かつて私は、(フロイトから借りた)重層的決定というカテゴリーがマルクスとレーニンの分析によっていわば要請され、期待されていたことを示すことによって、マルクスとフロイトの驚くべき類似性の一例をあげたことがある。重層的決定というカテゴリーはマルクスとレーニンによく適合するし、そのうえ、まさに矛盾が重層的に決定されていないヘーゲルと、マルクスやレーニンとの違いを際立たせるという利点を有している」(EPs, p.225, 249頁)。

しかし、アルチュセールが「重層的決定」という言葉を使ったのはこれが最後であった。「マルクス主義歴史理論の概念そのもののなかにこの重層的決定の基礎を築く」という課題

は、これ以後は放棄されたように見える。おそらく「決定」という言葉そのものが重荷になってきたのだ。その代わりにアルチュセールの問題関心の中心を徐々に占めるようになったのは、偶然の「出会い *rencontre*」の重要性である。

たとえば、1967年の「ヒューマニズム論争」では、資本主義そのものが複数の要素の「出会い」の結果として説明されている。「資本主義は一つの結果、しかもあらゆる結果の例に漏れず、歴史過程の結果である。……ところが資本主義は、発生 *genèse* という形式をもたない過程からの結果なのだ。発生という形式をもたない過程とはなにか。マルクスは何度も述べている。規定された複数の要素が出会う過程である、と。それら不可欠で判明な要素は、先行する歴史過程のなかで、それぞれ独立の異なる系譜を經由して生まれたのであり、しかも遡れるものなら、『起源』は複数あることになる。貨幣資本の蓄積、『自由な』労働力、技術革新、等々。明快にいつておくと、資本主義は、遡行すれば起源、『即自』、『萌芽』といったものとしての封建的生産様式にたどり着けるような発生の結果ではなく、一つの複合的過程の結果なのだ」(EPPII, p.540. 1094頁)。

このような「発生=創世記という形式をもたない過程」をアルチュセールはこう名付けている。「非発生的突然変異の弁証法 *une dialectique de mutations non génétiques*」。それこそ、マルクスとダーウィンが発見したものなのである。「哲学の視点から見れば、[マルクスとダーウィンによる] あれらの発見ははるかに広い射程の意義をもつ。実際、ある正確な一点に関し、あれらの発見は進化過程を遺伝学的に捉える見方の無効を、したがって発生についての進化論的イデオロギーの無効を証明し、まったく別の弁証法のイメージを差し出している。それは、進化論の目的論的弁証法、単なる貧乏人のヘーゲル主義とはおよそ異なる、非発生的突然変異の弁証法である」(EPPII, pp.527-8. 1082頁)。

歴史における「非発生的突然変異」に関するアルチュセールのこのような考えは、興味深いことに、現代のダーウィン派の進化生物学者の歴史認識とほとんど一致する。スティーヴン・ジェイ・グールドは、生物進化を「宝くじのような悲運多数死 *decimation*」として、つまり「大量絶滅」と「断続平衡」の複雑な相互作用として考え抜こうとした『ワンダフル・ライフ』の中で、次のように述べているからである。「私が問題にしているのは、あらゆる歴史の中心原理である『偶発性 *contingency*』である。歴史的な説明がその基礎をおいているのは、自然法則からの直接的な演繹ではなく、予測のつかないかたちで継起する先行状態である。この場合、一連の先行状態のうちのどれか一つが大きく変わるだけで、最終結果が変更されてしまう。したがって歴史上の最終結果は、それ以前に生じたすべての事態に依存している([すなわちそれを] 偶発的な付随条件としている) わけで、これこそが、ぬぐい去ることのできない決定的な歴史の刻印なのである¹¹⁾」。

アルチュセールによれば、そもそもマルクス主義の形成そのものが「出会い」の結果であった。1978年の「自らの限界にあるマルクス」で彼はこう述べている。「労働者階級の『有機的』知識人としての歴史的な役割をマルクスとエンゲルスに割り振った、ほんとうの意味での運命は、出会いによって決まった。彼らがかいくぐった直接的で実践的な経験、要するに、個人的な経験によって決まったのだ」（EPPI, p.389. 349-50頁）。

このように偶然の「出会い」を重視し、「非発生的突然変異の弁証法」をもって「進化論的イデオロギーの無効」を宣言しようとするアルチュセールが最後にたどり着いたのが、「出会いの唯物論」であった。1982年の試論「出会いの唯物論の地下水脈」の中で、彼はそれを次のように説明している。「話を分かりやすくするために、この唯物論をさしあたり出会いの唯物論と呼んでおこう。それはすなわち不確定なもの *aléatoire*、偶然性 *contingence* の唯物論であり、一つのまったく別の思考として、様々な既知の唯物論に対立する。後者のなかには、ふつう、マルクス、エンゲルス、レーニンに帰される唯物論も含まれている。彼らの唯物論は、合理主義の伝統に属するすべての唯物論と同じように、必然性と目的論の唯物論であり、したがって、観念論の一変態、偽装したあるかたちなのである」（EPPI, p.554. 500頁）。

マルクス主義的唯物論を「観念論の一変態」とみなす思想家を、ひとはもうマルクス主義者とは呼ばないだろう。アルチュセールがマルクス主義的唯物論を最終的に拒絶したのは、それが結局は「必然性と目的論の唯物論」にすぎなかったからである。しかし、彼は、エンゲルスやレーニンと一緒にマルクスをも丸ごと投げ捨ててしまったわけではない。そもそも「出会いの唯物論」そのものが、アルチュセールにとっては、「非発生的突然変異の弁証法」というマルクスの思考の別名にほかならなかった。だからアルチュセールは、マルクス主義的唯物論を批判しながらも、続けてこう述べるのである。「マルクスは無数の箇所、気紛れにではなく、こう説いている。資本主義的生産様式は『金貨をもった人間』と、自分の労働力よりほかになにももたないプロレタリアートの『出会い』から生まれた。……この考え方において重要な点は、補足すなわち本質の抽出であるよりは、出会いの『固まり』の不確定な性格であり、法則を云々しうる成し遂げられた事実を作り出すのはこの出会いなのである」（EPPI, pp.584-5. 531頁）。

歴史における「不確定性＝偶然性」を徹底的に思考しようとする。「重層的決定」にはじまり「出会いの唯物論」に終わるアルチュセールの思想を貫いているのは、まさにそれであった。しかし、彼の思考にはまだ曖昧さが残っている。「出会い」という言葉で彼が考え抜こうとした対象は、ロシア革命の勝利のような「例外的状況の例外性」と、生産様式という「構造」の歴史の両方を含んでいるからである。

事件や出来事は、それ自体「偶然性」の結果であると同時に次の「偶然的」結果の先行状態の一つだと言うことができる。構造もまた様々な要素の偶然的「出会い」によって形成されるのは確かだし、「非発生的突然変異」を生産様式の変遷に応用するのは魅力的なアイデアだと言ってもいい¹²⁾。しかし、その結果として発現する構造が定義上「無一時間的、非一時間的、通時的」に再生産されるものであるのだとすれば、「再生産」と「不確定性＝偶然性」とはどのような関係にあるのか。そもそも「構造」と「事件」との関係こそは、歴史認識と歴史叙述を志す者にとっての永遠の問題ではなかったか。

さらに言えば、出来事の「不確定性＝偶然性」について、「記述的なもの」を超える「哲学」を構築することには、どのような行為遂行的意味があるのだろうか。ユルゲン・ハーバーマスは、アルチュセールを念頭に置いているわけではないが、1976年の『史的唯物論の再構成』でこう述べている。「いまだ人間の手に負えない出来事のもつ不確定性 Kontingenzen に思い悩むことは、その出来事に理性的に介入しうる能力をわれわれが持っていると思おう度合いに応じて、新たな質を獲得してくる。その場合、この思い悩みは、新たな欲求のネガティブな側面を意味している。……外的自然の不確定性を前にして自覚された無力さの経験は、神話や呪術による解釈によって取り除かれねばならない¹³⁾」。

アルチュセールにとって、「必然性と目的論の唯物論」としてのマルクス主義は、このような意味での人間の「無力さ」を取り除くための「神話」にすぎなかった。しかし、「出会いの唯物論」は、それとはまた別の一つの「神話や呪術」ではないのだろうか。彼がのぞき込んでいる「地下水脈」とは、「世界の超越論的偶然性」へと回帰するハイデガー的な「es gibt [存る]の哲学」(EPPI, p.557. 503頁)なのだ。

5. アルチュセールの孤独

もう一度、アルチュセールの孤独に話を戻そう。彼は「マキャヴェリの孤独」について最後にこう述べている。「彼の最終的な孤独が、おそらくこれである。自分の思考がいくばくか歴史をつくることに荷担したとしても、そのとき自分はまだこの世にいないことを彼は知っていたのである」(SM, p.323. 422頁)。「アルチュセールの最終的な孤独が、おそらくこれである¹⁴⁾」、とエリオットが言葉を重ねたように、これはマキャヴェリに仮託したアルチュセール自身の感慨でもあったろう。しかし、アルチュセールは続けてこうも述べていた。「拒絶と立場とにおいて彼[マキャヴェリ]に近しいもう一つの別の思考、マルクスの思考だけが、彼をその孤独から救うことができた」(p.323. 422頁)。

そのマルクス自身も、アルチュセールによれば、フロイトの意味で孤独だったのだが、しかし孤立無援ではない。自分たちがマルクスを孤独から救うからだ。そして、そのことに

よって自分たちもまた孤独から救われる。アルチュセールは『資本論を読む』の中で、おそらくは自らをマルクスと重ね合わせながら、そう書いている。「既存の理論構成法の客観的限界と手を切り、彼の科学的発見が哲学に提起する問いを考える手掛かりを鍛え上げるためにマルクスが幾度も繰り返した努力や彼の挫折は、そして彼の後戻りすら、彼がわれわれよりずっと以前に絶対的孤独のなかで体験した理論的ドラマの一部をなしている。……われわれのほうはといえば、われわれが孤独でないのはマルクスのおかげなのである」（LCII, p.71. 265頁）。

では、アルチュセールの絶対的孤独はどうなるのだろうか。誰が彼をその孤独から救うのだろうか。エリオットは、その論文を次のように結んでいる。「最終審級においては、拒絶と立場とにおいてアルチュセールにどれほど近しくても、どんな思想体系も彼をその孤独から救うことはできないだろう——そうできるのは、彼が支援しようと全力を尽くした解放的実践だけである。われわれはといえば、マルクス主義の危機に直面しながらもわれわれが孤独ではないのは、他の誰よりもルイ・アルチュセールのおかげなのである¹⁵⁾」。

たしかに、「不確定性＝偶然性」を考え抜こうとしたかぎりでは、「どんな思想体系も彼をその孤独から救うことはできないだろう」。しかし、私たち自身はといえば、エリオットとは違う意味においてではあるが、私たちもけっして孤独ではない。私の考えでは、私たちがアルチュセールに学ぶことができる最後の機会は、アルチュセールがマルクスから距離を取り、マルクス主義から離れるその瞬間にある。

すでに見たように、「重層的決定」という概念を放棄すると同時に、「進化論の目的論的弁証法」への批判に問題意識を集中していく時期のアルチュセールにとって、マルクスにも残る「歴史哲学」的残滓はもはや批判の対象でしかなかった。だから、マルクスの思想は慎重に腑分けされ、その「有効性」は限定されなければならない。そのような批判と限定を、アルチュセールは1978年に集中的に行っている。

2月に書かれた「今日のマルクス主義」では、アルチュセールは次のように、マルクスにおける「歴史の方向」という「歴史哲学的観念」を厳しく拒絶する。「いよいよ批判されていくとはいえ、彼のもとには、つねに透かしのごとく歴史哲学的な観念、歴史の《方向》という観念が現前する。この《方向》は、特定の生産様式の後に特定の生産様式がくる『漸進的時期』の継起として具体的に示され（『経済学批判』の「序言」、1859年）、共産主義の透明性にむかっていく。『必然性の王国』の後に来る『自由の王国』なる観念的表象が、マルクスのもとには見られるのである。その共同体では、国家と商品関係と同様、余分となった社会関係に、諸個人の自由な発展が取って代わるとの神話が」（SM, pp.300-301. 390頁）。

そして、続く3月の「『有限』な理論としてのマルクス主義」では、アルチュセールは次

のように、マルクスの「共産主義のイメージ」そのものの批判を試みている。「あのイメージは、マルクスが、宗教のいかなる理論ももたずして、宗教を直接のモデルとしつつフェティシズムと疎外を考えたときの、怪しげな諸概念に、存命力(または延命力)を供給しつづける——『1844年草稿』の全空間を占領してのち、大挙して『経済学批判要綱』にも再帰し、しかもなお『資本論』の中にその痕跡を残す諸概念。これらの概念の謎を打ち破るには、自らつくろうとしていたマルクスの共産主義像へ立ち返らなくてはならない。この問題多き像を唯物論的批判にかけるとき、あれらの概念の解釈が開始されうるのだ。そしてこの批判をとおして、マルクスの何がいまだ歴史の《方向》といった観念論的インスピレーションから抜け切れていないのかの目安を付ける作業が緒に就く。理論的にも政治的にもやってみるだけの価値ある、これは賭である」(SM, p.292. 382頁)。

この「賭」は、つまり共産主義という「壮大な物語」への批判は、同時に、マルクスの理論を資本主義的生産様式の批判的分析へと限定することによって「救い出す」試みでもあった。それが、マルクス主義を「有限な」理論だと規定することの意味である。

「ぼくの考えでは、マルクス主義理論は『有限』で、限定されている。資本主義的生産様式の分析、資本主義の矛盾した傾向——資本主義を廃止してそれを『別のもの』、空洞としてすでに資本主義社会の内部に描き出されている『別のもの』で置き換えることへと移行の可能性を開く傾向——の分析に、それは限定されている。マルクス主義理論は『有限』であると述べることは、マルクス主義理論は歴史哲学とは正反対のものである、との本質的観念を主張することだ。……マルクス主義理論は、現在進行中の局面、資本主義的搾取の局面に、登録・限定されている。将来についてこの理論の言いうることは、現在進行中の傾向がもつ複数の可能性の、点線で引かれる消極的延長線以上のものではない。……移行についてなにを言っても、そこで問題になりうるのは、現在進行中の傾向から導き出される指針でしかありえない。マルクスの言うどの傾向とも同じく、現在進行中の傾向も『阻止』されていて、政治的階級闘争がそれに現実性を与えないなら、完結しないこともありうる。この現実性の決定された積極的なかたちを、現時点で予見することはできない」(SM, pp.285-6. 373頁)。

マルクスの理論の有効性は「資本主義的生産様式の分析、資本主義の矛盾した傾向の分析に限定されている」。私なりの言い方をすれば、マルクスそのひとの思考から今なお学ぶべきものを批判的に「救い出す」とすれば、それは発展段階論でも歴史的必然性の論理でもなく、様々な生産様式が資本によって接合され再編成される複合的過程を対象とした「構造としての世界史」だということである¹⁶⁾。目的論的必然性を峻拒し、共産主義的終末論を放棄し、しかし、資本主義世界システムの批判的解剖学者であり続け、新たな「出会い」に賭け

ること。それがアルチュセールの遺言だったと私は考えている。たしかに、誰ももうアルチュセールをその孤独から救うことはできないだろう。しかし、私たちが孤独でないのは、少なくとも部分的には、やはりアルチュセールのおかげなのである。

*ルイ・アルチュセール（Louis Althusser, 1918-1990）の著作は次の略号によって示し、引用文の後に略号と原文および邦訳のページ数を記す。

PM: *Pour Marx*, Paris: Maspero, 1965. Réimpression, Paris: La Découverte, 1996. 河野健二他訳『マルクスのために』平凡社ライブラリー、1994年。

LCII: *Lire le Capital*, nouvelle édition, tome 2, Paris: Maspero, 1968. 今村仁司訳『資本論を読む・中』ちくま学芸文庫、1997年。

ADL: *L'avenir dure longtemps suivi de Les faits*, Paris: Stock/IMEC, 1992. 宮林寛訳『未来は長く続く——アルチュセール自伝』河出書房新社、2002年。

EPs: *Écrits sur la psychoanalyse. Freud et Lacan*, Paris: Stock/IMEC, 1993. 石田靖夫他訳『フロイトとラカン——精神分析論集』人文書院、2001年

EPPI: *Écrits philosophiques et politiques*, tome 1, Paris: Stock/IMEC, 1994. 市田良彦他訳『哲学・政治著作集 I』藤原書店、1999年。

EPPII: *Écrits philosophiques et politiques*, tome 2, Paris: Stock/IMEC, 1995. 市田良彦他訳『哲学・政治著作集 II』藤原書店、1999年。

SM: *Solitude de Machiavel*, Paris: PUF, 1998. 福井和美訳『マキャヴェリの孤独』藤原書店、2001年。

注

- 1) アルチュセールの自伝には、次のような文章が繰り返し現れる。「私には本当に父親があったのだろうか」(ADL, p.43. 54頁)。「実をいうと私が手に入れたかったものは、自分自身の父親になるという役どころだったのである」(p.163. 227頁)。
- 2) Gregory Elliott, *Althusser's Solitude*, in *The Althusserian Legacy*, edited by E. Ann Kaplan and Michael Sprinker, London: Verso, 1993, pp.33-4.
- 3) Martin Jay, *Marxism and Totality*, Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1984, Ch.13. 荒川磯男他訳『マルクス主義と全体性』国文社、1993年、第13章。
- 4) Étienne Balibar, *Écrits pour Althusser*, Paris: La Découverte, 1991. 福井和美訳『ルイ・アルチュセール』藤原書店、1994年。
- 5) 植村邦彦「社会の建築術——『土台と上部構造』という隠喩の系譜——」、『現代思想』第30巻13号、2002年11月。
- 6) cf. EPPI, pp.59-246. 51-217頁。
- 7) Friedrich Engels an Joseph Bloch vom 21. Sept. 1890, in: Marx/Engels, *Werke*, Bd.37, Berlin: Dietz Verlag, 1964, S.463.
- 8) *ibid.*
- 9) Sigmund Freud, *Die Traumdeutung*, in: *Gesammelte Werke*, Bd.II/III, London: Imago Publishing, 1942. Nachdruck, Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag, 1999, S.575. 高橋義孝訳『フロイト著作集』第2巻、人文書院、1968年、467頁。
- 10) Terry Eagleton, *Ideology: An Introduction*, London: Verso, 1991, pp.136-53. 大橋洋一訳『イデオロギー

とは何か』平凡社、1996年、239-66頁。

- 11) Stephen Jay Gould, *Wonderful Life: The Burgess Shale and the Nature of History*, New York: Norton, 1989, p.283. 渡辺政隆訳『ワンダフル・ライフ』ハヤカワ文庫、2000年、490頁。
- 12) それを展開したのがサミール・アミンの「周辺革命」説だと見ることもできよう。cf. Samir Amin, *Le développement inégal: Essai sur les formes sociales du capitalisme périphérique*, Paris: Les Éditions de Minuit, 1973. 西川潤訳『不均等発展』東洋経済新報社、1983年。
- 13) Jurgen Habermas, *Zur Rekonstruktion des Historischen Materialismus*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1976, S.181. 清水多吉監訳『史的唯物論の再構成』法政大学出版局、2000年、212-3頁。
- 14) Elliott, *ibid.*, p.34.
- 15) *ibid.*
- 16) 植村邦彦『マルクスを読む』青土社、2001年、第二章、を参照されたい。